第２回調布市教育プラン策定検討委員会　意見概要

資料１

No	施策	主要事業等	主な意見	教育プランへの反映箇所
1	1	背景	「実社会に直接触れ合う」という表記があるが、「人と関わりあう『直接体験』」 という記載にしてはどうか。	①
2	1	1　命を大切にする教育の推進	「命の授業」後の懇談会・交流会は保護者同士が命や安全について語り合える場であるため、参加率を高める工夫やアプローチが必要である。	
3	1	1　命を大切にする教育の推進	主要事業「２３　安全教育の推進」と関連事業に位置付けることも想定している。	
4	1	1　命を大切にする教育の推進	「命の授業」などにおいて保護者の参加が少ない課題について、子どもが「あんな授業聞いても仕方ないから行かない」と保護者から言われている実態を聞いたことがある。大切な授業だからこそ一人でも多く参加してもらうための工夫が学校側にも必要である。	
5	1	2　人権教育の推進	こども性暴力防止法を踏まえ、子ども自身が「嫌なことは嫌と言う」「困ったら相談する」という自己防衛と権利を学ぶ予防教育や教職員研修をプランに明確に位置付けてはどうか。	
6	1	2　人権教育の推進	主要事業１「命を大切にする教育の推進」と主要事業２「人権教育の推進」は深く関連しているのではないか。	
7	1	2　人権教育の推進	「インクルーシブな教育」が記載されるのはよいと思う。	
8	1	2　人権教育の推進	障害、多様性などを包摂するインクルーシブな教育という部分で、調布市が昨年度作成した、障害の社会モデルを学ぶための教材を活用する、というようなことを入れられないでしょうか。	②
9	1	3　いじめの防止と対応	いじめの防止の記述について、研修を通じた未然防止だけでなく、学校が「組織的に対応している体制」を明記して記述を強めたい。	③
10	1	3　いじめの防止と対応	SNS・ネットいじめ対策として、施策２の「８　デジタルの活用と情報教育の充実」を、児童虐待防止対策として施策４の「様々な環境や背景に応じた児童生徒への支援」を関連事業としてはどうか。	
11	1	3　いじめの防止と対応	実態に即してスクールソーシャルワーカーについても記載があるとよい。	
12	1	3　いじめの防止と対応	「３　いじめの防止と対応」について、いじめ対策は問題発生後に対処する「モグラ叩き」ではなく、お互いを大切に思う根底の「いじめをそもそも起こさない学校風土、居心地向上プロジェクトの理念」を醸成することが最重要である。大人がお膳立てするのではなく、子ども自身が主体的に活動して仲間社会を作るという「民主的な社会の担い手」としての経験を子どもにさせるべきである。	
13	1	4　道徳教育の推進	「人格の完成」「国民の育成」とあるが表現に違和感がある。他者への理解が深まる教育や善悪の判断につながる教育とそれをふまえて豊かな心の育成、共生社会の実現など、不要な誤解を与えない表現だとよい。	④
14	1	4　道徳教育の推進	「自立した人間」という言葉について、身辺自立（立つ自立）か、自己規律（自らを律する自立）か、調布市としてどちらをポイントにするのか定義を明確にしてほしい。	
15	1	4　道徳教育の推進	特別な教科道徳として、子どもたちが安心して発言できる環境をつくる具体的な取組を実施していってほしい。	
16	1	4　道徳教育の推進	自尊感情測定尺度（東京都版）における評価シートを活用した教育活動の実施は急に出てきた印象があるので丁寧な説明があるとよい。	
17	1	4　道徳教育の推進	「人格の完成」「国民の育成」という表現は教育基本法や学習指導要領にある表現である。市民に分かやすい表現とするか検討する。	
18	1	4　道徳教育の推進	学校は協調性を身に着ける場でもあると考えており、「協調性」「仲間づくり」といった視点も追記していきたいと考えている。	
19	1	5　体験活動の推進	「海外体験学習」は、行けない大半の子どもたちも英語や外国語に親しめる日常的な学習事業の整備が必要ではないか。	

20	1	5　体験活動の推進	より具体的な事業がイメージできるような記載を検討してほしい。	用語集
21	1	5　体験活動の推進	「宿泊を伴う体験学習」は移動教室と修学旅行を指していると思うが、どこまで具体的に記載するかは教育委員会で検討するとよい。	
22	1	5　体験活動の推進	特別支援学級の宿泊を伴う体験学習については、特別支援学級と通常の学級の児童生徒の日頃からの交流を充実することが、より重要であるという意見が保護者からも出ており、記載を検討していくとよい。	
23	1	5　体験活動の推進	移動が困難な子どもが教室移動などの交流活動に参加できないことで排除されてしまうため、個別最適な学びを可能にするインクルーシブ教育の充実を主要事業にしっかりと位置付けてほしい。	
24	1	成果指標	子どものに直接アンケートをとって「いじめはどんな理由があってもいけないこと」を理解した児童生徒の割合は100%にならないのか。	
25	1	成果指標	直前に友達とトラブルがあるなど、回答時の子どもの心情にもよると思うが大半の児童生徒が「よくない」と感じているという認識を共有できるとよい。	
26	1	全体	特に施策１は主要事業がすべて関連していると思うのでなんらかのかたちで表現できるとよい。	
27	1	全体	施策１は主要事業がすべて関連しているという表現はできるとよい。	
28	1	全体	知的発達に遅れがある子どもに対しても、言葉だけでなくイラストや写真、カード等の視覚教材を用いて理解できる方法で伝える必要があり、発達段階や障害特性に応じた教育の方法を主要事業の中でしてほしい。	
29	1	全体	安全教育研究の中で、いじめ、命、性被害予防などに対する価値観に「教員・保護者・地域」で温度差があることを実感した。子どもは身近な大人の価値観に影響を受けるため、まずは大人がそれぞれ異なる価値観を持っていることを、子どもが認識し理解することが重要。「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」が立ち上がっているので、価値観を共有し語り合う場として活用すべき。	
30	1	全体	中学校で年間300人以上の生徒が地域の祭りや施設で活躍する地域ボランティアが、子どもの自己肯定感を大きく育てている成果が上がっている。これらを結ぶ「地域学校協働本部」や社会教育の重要性をプランに記述して充実させるべき。	
31	1～4	全体	4つの施策について共通してお願いしたいのは、「すべての子どもが、その子に合った方法で、安心して主体的に参加できる環境をつくること」です。 「同じ場所にいること」だけをインクルーシブ教育とするのではなく、 「その子が分かり、その子なりに参加し、学び、達成感を得られること」 までを含めてインクルーシブ教育として、この基本プランに位置付けていただくことを要望します。 全ての子どもが「自分もここにいていい」「自分も参加できる」「やってみたい」と思える教育・地域を、調布市として目指していただきたいと思います。	
32	2	背景	コミュニティ・スクールと地域学校協働本部が推進されていくのであれば、協働的な学びについてもふれられるとよい。	
33	2	6　基礎的・基本的な知識及び技能や学習満足度の向上と学ぶ意欲の育成	探究的な学習と基礎的な学びは両輪で推進することが重要で、非認知能力も重要になると感じている。	
34	2	6　基礎的・基本的な知識及び技能や学習満足度の向上と学ぶ意欲の育成	デジタルを活用して自ら探究し学びのプロセスを自ら調整・選択していく学習を考慮し、「自己調整学習」や「自由進度学習」という表現を用いていはどうか。	
35	2	6　基礎的・基本的な知識及び技能や学習満足度の向上と学ぶ意欲の育成	２年生の時計の授業（「10時間後は何時か」など）でわからない児童が多い。家庭内にアナログ時計がないことが影響しているかもしれない。教育委員会が学校に練習用のミニ時計を配布・配備するなどの具体的な取組ができるとよい。	
36	2	7　小中連携教育の推進	幼保小の連携について主な取組の記載も検討してほしい。幼稚園と保育園でも子どもの環境は様々であり、円滑な接続ということを意識した情報共有が重要だと感じている。	
37	2	7　小中連携教育の推進	英語教育の今後さらに重要になると感じている。小学校と中学校の連携を強化していけるとよい。	
38	2	7　小中連携教育の推進	現在進めている「第四中学校と若葉小学校などの施設一体型整備」を好機として、小中連携・一貫教育を一層推進する記述を盛り込みたい。	

39	2	7　小中連携教育の推進	学校の先生から子ども発達センターへの問い合わせはあまりないと聞いているが、情報共有の機会がもっと増えていくとよい。	
40	2	7　小中連携教育の推進	小中高12年間引き継がれる「キャリアパスポート」について、小学校ごとに形式や内容が異なるため、複数の小学校から生徒が集まる中学校側で効果的に扱うのが難しいのではないか。	
41	2	7　小中連携教育の推進	キャリアパスポートは12年間のキャリア発達を見据えたツールであるが、現場での効果的な活用にはまだ課題があり、努力が必要な段階であると認識している。	
42	2	7　小中連携教育の推進	20年間にわたり小1の学習支援に入っている経験から、入学時点で「自分の名前が書けない子」「数字が書けない子」が毎年クラスに必ず１名はいる状況。ひらがなは小学校で習うため本質的には問題ないが、周囲の「書ける」児童とのギャップに本人が傷つかないよう、幼保小連携で事前配慮や寄り添った支援が必要。	
43	2	7　小中連携教育の推進	「７　小中連携教育の推進」の「情報共有」はすでに実施されているため、園児が小学校に行く、小学校教員が園に行くなどの「人と人とのリアルな交流」という文言を盛り込み、充実させていくべき。	
44	2	8　デジタルの活用と情報教育の推進	技術的な進展が著しいＡＩの活用やリテラシー向上とともに、これまでと同様に基礎的な学ぶ力の向上についてしっかり記載していく必要があると考えている。	
45	2	8　デジタルの活用と情報教育の推進	ＡＩを使いすぎて考える機会が減ってしまうことがないようにリテラシー教育が重要になると考えている。	
46	2	8　デジタルの活用と情報教育の推進	若者がAIに相談する機会が増えているが、回答が必ずしも正しいとは限らない。デジタルを活用する上で、正誤を見極めるバランス感覚を指導することの難しさと注意喚起が必要。	
47	2	8　デジタルの活用と情報教育の推進	「デジタル化について先進的な取り組みをしてきた国々が抱える課題を踏まえたデジタル化の負の側面についての科学的調査の継続実施」といった文言を入れていただくよう要望いたします。	
48	2	9　グローバルな人材の育成	「学校２０２０レガシー」という文言について、今の小学生はオリンピックを知らない世代であり、これから４年間のプランに載せる言葉として馴染まないため、「共生社会の実現」や「グローバル人材の育成」に表現を改めるべき。	
49	2	9　グローバルな人材の育成	「ＡＬＴの活用等の活用等による「使える英語」を習得する意欲の醸成」や「小中連携の視点も踏まえた実践的教育の推進」については具体的にどのようなことを指すのか、もう少し説明がほしい。	
50	2	9　グローバルな人材の育成	新たにはじまった小学生の英語教育が中学校でどう有機的に活かしていくかという点でＡＬＴを活用していけるとよいと考えている。	
51	2	9　グローバルな人材の育成	社会教育分野の中学生海外体験学習はグローバルな人材の育成の視点もあり、関連事業に位置付けた。	
52	2	10 学校図書館の活用推進	ビブリオバトルのような、子どもたちが自発的におすすめの本を紹介し合えるような読書活動をプランに追加できないか。	
53	2	成果指標	中学生の目標値が8.0ポイントから7.0ポイントに下方修正されているように見える点、また「主体的な学び」を一気に90%に引き上げる点に違和感がある。	
54	3	背景	ウェルビーイングについての記載があるが、発達や成長のために健やかな体を育成するということも子どもにとっては重要だと考えている。書き方は検討できるとよい。	
55	3	11　体力向上への支援	楽しんで体を動かすことができる環境づくりを推進できるとよい。あこがれや楽しさから体力向上につながる取組を充実してほしい。	
56	3	11　体力向上への支援	部活動の地域展開について、過渡期なので学校や地域だけでなく市も注力していってほしい。	
57	3	11　体力向上への支援	ライフスタイルの変化等により遊びの経験が少ない子どもも増えている。学校や地域のほか、家庭との連携も重要になってくると感じている。「ちょこプラ１」の取組についてもプランの中でふれてはどうか。	
58	3	11　体力向上への支援	経年の変化でみても、小学生の体力運動能力は向上している傾向にある。	
59	3	11　体力向上への支援	「運動の時間を確保」とあるが、施策としては子どもたちが自発的に取り組むための「場や機会を充実する」という記載の方が施策としては妥当だと感じた。	⑤
60	3	11　体力向上への支援	「１１　体力向上への支援」について、特別支援学級の部活動や地域移行・個別計画を進める際、単に教員の負担軽減だけでなく、障害のある生徒が地域で安心して活動できるよう、障害特性を理解した外部指導員の配置や学校・家庭・地域の連携ルールをプランに明記してほしい。	

61	3	11　体力向上への支援	中学校の「水泳指導補助員」は安全確保の監視員であり指導はしていない。水泳の授業期間が短いため、夏休み中などに地域で水泳の指導をする活動できる仕組みができるとよい。	
62	3	11　体力向上への支援	地域には素晴らしいスキルを持った人材がいるが、コーディネーターとして出会いや発掘が難しいため、効果的な紹介システムや募集の仕組み（広報等）を整えてほしい。	
63	3	11　体力向上への支援	「１１　体力向上への支援」について、「スポーツライフ」という言葉は、小中学生や市民にとって馴染みが薄いため、より分かりやすい表現に変更してはどうか。	
64	3	11　体力向上への支援	成果指標が「東京都の平均値を上回る」となっていることに違和感がある。「１１　体力向上への支援」について、体力テストは他者との競争ではなく、本人が健康に関心を持ち主体的に目標に向かう態度を育てるもの。プラン全体が大人から訓練を課すイメージの文言（徹底、実施など）に偏っているため、子どもの主体性を引き出す記述にするべき。	
65	3	11　体力向上への支援	「１１　体力向上への支援」について、熱中症リスクや現場の指導員予算不足からプール授業実施が困難な現状がある。また、「１２　食育の推進」の「大学企業等との連携」について、中学校の現場ではほとんど実態がなく、プランに書くことに疑問がある。	
66	3	11　体力向上への支援	小学校で事故防止やスペースの都合によりジャングルジム等の大型遊具が相次いで撤去され、代替遊具がないため体力をつけるチャンスが減少している。昔の「地面に埋めたタイヤ」など、大人の工夫で安価に設置できる遊び場を教育プランに盛り込んでほしい。	
67	3	11　体力向上への支援	体力データについて、小1～小3は低いものの、小4以降男子、小6以降女子が体育教育の効果でプラスに転じている。中休みの外遊びも「楽しいこと」をベースに機会を増やす努力をしている。	
68	3	12　食育の推進	中学校におけるアフラックと連携した「がん教育」、小学校の「受動喫煙防止教育」、薬剤師連携の「薬物乱用防止教育」など、健康づくりにつながる視点も追加を検討したい。	⑥
69	3	12　食育の推進	食育の推進は幼稚園・保育園で最も力を入れている部分だと思う。幼保小連携の視点も持って推進すべきてはないか。	
70	3	12　食育の推進	主要事業22　食物アレルギー対策の推進を関連事業に位置付ける検討をしても良いかもしれない。	
71	3	12　食育の推進	「デジタル化に対応した食育」とはどのようなものなのか。現状給食だよりのＰＤＦ配布などにも取り組んでいる。	
72	3	成果指標	小学生の体力運動能力の数値が東京都の平均を下回っているのは気になる。学校でも運動を習慣化できるとよい。	
73	3	成果指標	成果指標は小学生で東京都平均を下回っていたが中学生時点で上回るようになったという捉え方もできると考えており、学校側の取組が必ずしもマイナスではないと考えている。	
74	3	成果指標	「成果指標」について、令和7年度の実績において、目標未達（▲マーク）にだけ注目せず、前回（令和4年度）は上がっていたし、中学校で7ポイント以上上回っている、成果が出ていることもあるので、「ここまで体力が上がってきている」というポジティブな側面をもっと市民にアピールすべき。	
75	3	全体	施策３全体として、「体力向上」と「食育」のみで生活習慣や保健の観点があっさりしているため、新規主要事業として「健康づくりの充実（学校保健）」を追加してもよいと思う。	
76	4	13　特別支援教育の推進	特別支援が必要な子どもが宿泊を伴う活動に参加する際、安心感を持たせるための日頃から協働的な学びや個別事前学習が非常に重要である。	
77	4	13　特別支援教育の推進	「発達障害のある児童生徒への環境・体制整備」とあるが発達障害に限らず、すべての障害のある児童生徒への環境・体制整備が求められるべきではないか。	⑦
78	4	14　不登校児童生徒への支援	不登校から大人の引きこもりになっていくケースもあると思う。進路支援とも連携して切れ目のない支援に取り組んでいけるとよい。また、学校卒業後に高校・サポート校を中退した子どもを「子ども・若者支援地域ネットワーク」等へ確実につなげて誰も取り残さない取組が必用ではないか。	
79	4	14　不登校児童生徒への支援	「１４ 不登校児童生徒への支援」はCANVASなど新しい取組もあり、この４年間で進んでいる実感がある。	
80	4	14　不登校児童生徒への支援	校内別室はハード面で進んできた実感があるが、現場として人材の確保について課題感がある。	
81	4	14　不登校児童生徒への支援	子どもの居場所は学校だけでなく地域にも必要だと考えている。社会教育分野とも連携して「１４ 不登校児童生徒への支援」に取り組んでいけるとよい。	

82	4	14　不登校児童生徒への支援	日常の交流や協働学習がほぼ皆無のまま、事前体験もなしに突然宿泊行事（八ヶ岳など）に参加することは本人にとって極めて大きなハードル。支援学級での宿泊活動をなくす方針であれば、通常学級との日常的な交流協働学習を個別計画に明確に位置づけ、お互いが「お客様」にならないよう合理的配慮を行うべきである。	
83	4	14　不登校児童生徒への支援	「１４　不登校児童生徒への支援」について、中学校の登校しぶりの子どもを受け入れる別室の現場では、生徒の来る時間帯がまちまちで、給食の配膳や個別面談など多様な対応に追われている。スタッフ（スクールサポーター1名、地域支援員1名）に対して生徒数が5～8人でさらに増える見込みであるなど、が増加傾向にあり、現場は人手不足を感じているため、実態に即した支援員配置が必要である。	
84	4	14　不登校児童生徒への支援	「１４　不登校児童生徒への支援」について、東京都の「インクルーシブ教育支援員」養成講座を修了し、学校現場を熱心に手伝ってくれていた調布市内の40代女性が、調布市に予算採用枠がなかったために小金井市の方で働くことになったもったいないと思っている。都の養成制度と連動した市の採用配置の仕組みが必要である。	
85	4	14　不登校児童生徒への支援	週1回でもマンツーマンで向き合う通級などのサポートは子どもの落ち着きに非常に大きな効果があるため、こうした支援の充実が必要である。	
86	4	14　不登校児童生徒への支援	不登校支援について、早期支援だけでなく、現場では最も重要と考えられる「長期化への対応や、学校との繋がりの維持」の重要性を明記すべきである。	
87	4	14　不登校児童生徒への支援	大学連携とは東京学芸大学などの学生（心理実習生）が学校や適応指導教室に入り支援するプロジェクト（資料６用語説明の29）のこと。	
88	4	15　個に応じたきめ細かな教育相談の充実	「１５ 個に応じたきめ細かな教育相談の充実」の中で、一人一台端末を活用して相談につなげていくということは現在も取り組んでおり、今後も充実していけるとよいと考えている。	
89	4	15　個に応じたきめ細かな教育相談の充実	「１５　個に応じたきめ細かな教育相談の充実」において、「教育支援コーディネーターがどこにいるのか」「教育相談所が各校なのかどこに設置されているのか」など、市民が本当に知りたい情報を知ってもらえるような取組を具体的にプランに書き込んでほしい。	用語集
90	4	16　様々な環境や背景に応じた児童生徒への支援	子どもが自身の興味関心にあった多様な学び方ができる環境を整えて、教育プラン全体で魅力ある学校づくりを推進することで、不登校になる子どもも減らしていけるとよい。	
91	4	16　様々な環境や背景に応じた児童生徒への支援	確保されたインクルーシブ支援の予算について、教員不足の人員確保に流用されていると認識しているが、本来の特別な支援を必要とする子どものために正しく使われるよう要望したい。	
92	4	成果指標	成果指標の小学生の現状値が100%になっていないが、今後連携型の個別指導計画の策定が調布市でも進んでいくのでそこのこもふれられるとよい。	
93	4	背景	インクルーシブな教育において合理的な配慮が注力してほしい。用語集の「合理的な配慮」の解説文で「障害者から現に社会的障壁の除去を必要としている旨の意思の表明があった場合において」とあるが、小学校１年生には難しく、障害者の認定を受けていない人でも合理的配慮があった方がよいケースもある実態をふまえて修正できるとよい。	用語集
94	4	全体	支援を必要としている児童生徒に届く施策であるとよい。	
95	4	全体	個に応じたきめ細かな支援は着々と進んできている印象がある。	
96	4	全体	一人一台端末を活用は様々な施策で取り組んでいけるとよい。	